上田市文化財調査報告書　第17集

立丁場遺跡

—長野県上田市立丁場遺跡緊急発掘調査報告書—

1981年3月

上田市教育委員会
長野県東信土地改良事務所

上田市文化財調査報告書　第17集

立丁場遺跡

—長野県上田市立丁場遺跡緊急発掘調査報告書—

1981年3月

上田市教育委員会
長野県東信土地改良事務所

序

上田市豊里地区は昭和46年から49年にわたって実施された埋蔵文化財の分布調査により、貴重な遺跡が多数存在することが知られております。

このたび、この地区を対象として県営圃場整備事業が昭和55年度から実施されることになりました。上田市教育委員会では、長野県教育委員会の指導により長野県東信土地改良事務所と協議して、豊里地区の立丁場遺跡の緊急発掘を行なうことにしました。

発掘調査は調査団長に上田市文化財調査委員五十嵐幹雄先生をお願いし、11月中旬から開始されました。調査は暮もおし迫った12月中旬まで続行され、降雪、厳寒にもかかわらず熱心に行なわれました。その結果、学術上貴重な成果をあげることができました。

終始発掘調査にご尽力いただいた調査団の諸先生方、調査にご協力いただいた小井田、大日ノ木の自治会の皆さん、並に圃場整備にあたられた東信土地改良事務所の関係者の皆さんに心より厚くお礼申し上げます。

昭和56年3月

上田市教育長　滝　沢　　石

例　　言

1　本書は昭和55年11月17日～12月24日までにわたって発掘調査された、長野県上田市大字芳田字立丁場に位置する、「立丁場遺跡」の調査報告書である。

2　本調査は、東信土地改良事務所の委託を受けた、上田市教育委員会が行った。

3　本調査は、五十嵐幹雄を調査団長として上田市教育委員会が委嘱した上田市遺跡調査団によって行われた。また本書の作成も同調査団が行った。

4　本書に挿入した遺構・遺物の実測図は、坂井美嗣・小林真寿・中川政信・宮原洋子が行った。

5　本書に掲載した写真は、中川政信が撮影したものを使用した。

6　本書の編集は、中川政信が行った。

7　本遺跡の資料は、上田市立信濃国分寺資料館に保管されている。

目　　次

序　文
例　言
第１章　位置と環境…… 1
　第１節　自然的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1
第２章　調査の経過…… 3
　第１節　調査に至る経緯…… 3
　第２節調査団の構成…… 3
　第３節発掘調査日誌…… 4
第３章　層　　序…… 6
第４章　遺構と遺物…… 9
　第１節　遺構…… 9
　　１．住居址（第１号・第２号）…… 9
　　２．火床址（１・２・３）…… 11
　　３．土坑（１・２・３）…… 13
　　４．掘立柱状建物址１…… 14
　　５．列石遺構…… 14
　第２節　出土遺物…… 17
第５章　まとめ…… 19

挿　図　目　次

第１図　立丁場遺跡の位置図…… 2
第２図　立丁場遺跡第１トレンチ西側層序…… 6
第３図　Ｆ・２～Ａ・２列地層断面図…… 7
第４図　立丁場遺跡遺構全体図…… 8
第５図　第１号住居址実測図…… 10
第６図　火床１実測図…… 10
第７図　第２号住居址・土坑１・第２トレンチ実測図…… 11
第８図　火床２・３実測図…… 12
第９図　土坑２・３実測図…… 13
第10図　掘立柱状建物址１実測図…… 15
第11図　第１トレンチ〈２〉内列石遺構実測図…… 16
第12図　立丁場遺跡出土遺物…… 18

図　版　目　次

第１図版　遺跡・遺構全景…… 1
第２図版　遺構（第１号・第２号住居址）…… 2
第３図版　遺構（土坑１）、遺物出土状態（鉄鏃・縄文式土器）…… 3
第４図版　遺構（火床１・２・３）…… 4
第５図版　遺構（火床３・掘立柱状建物址・列石遺構）…… 5

第１章　位置と環境

第１節　自然的環境

立丁場遺跡が位置する上田市小井田区は，烏帽子岳西南麓に続く殿城山の南西、神川河岸段丘の新町面（第一段丘面）に位置する。大日ノ木集落南端から流れてくる瀬沢川と柄沢によって形成された扇状地端で、山麓の押し出し等で起伏に富み平坦部が少ないという環境である。このため遺跡周辺の地目は，平坦部が少なく斜面が大部分を占めるという複雑な地形を形成しているので、田・畑地・果樹園等変化に富んでいる。

第２節　歴史的環境

立丁場遺跡周辺すなわち、豊殿地区には立丁場遺跡を含め、数多くの遺跡が存在している。まず、縄文時代の遺跡は前期から中期まで発見されており、晩期まではその分布地が確認されている。時期的には早創期をのぞき他の時期は確認されているが、主体となる該期は、縄文時代中期以後になる。遺跡数は25を数えることができる。前期は殿城字城山の城山遺跡において、前期後半の下島式が発見され、中期は勝坂式から加曽利Ｅ式末までほぼ全時期が発見されている。後期は大字漆戸字北ノ平の堂下遺跡において後期初頭の堀之内式が、また大字芳田字大木の大木遺跡でも堀之内式土器が見つかっている。

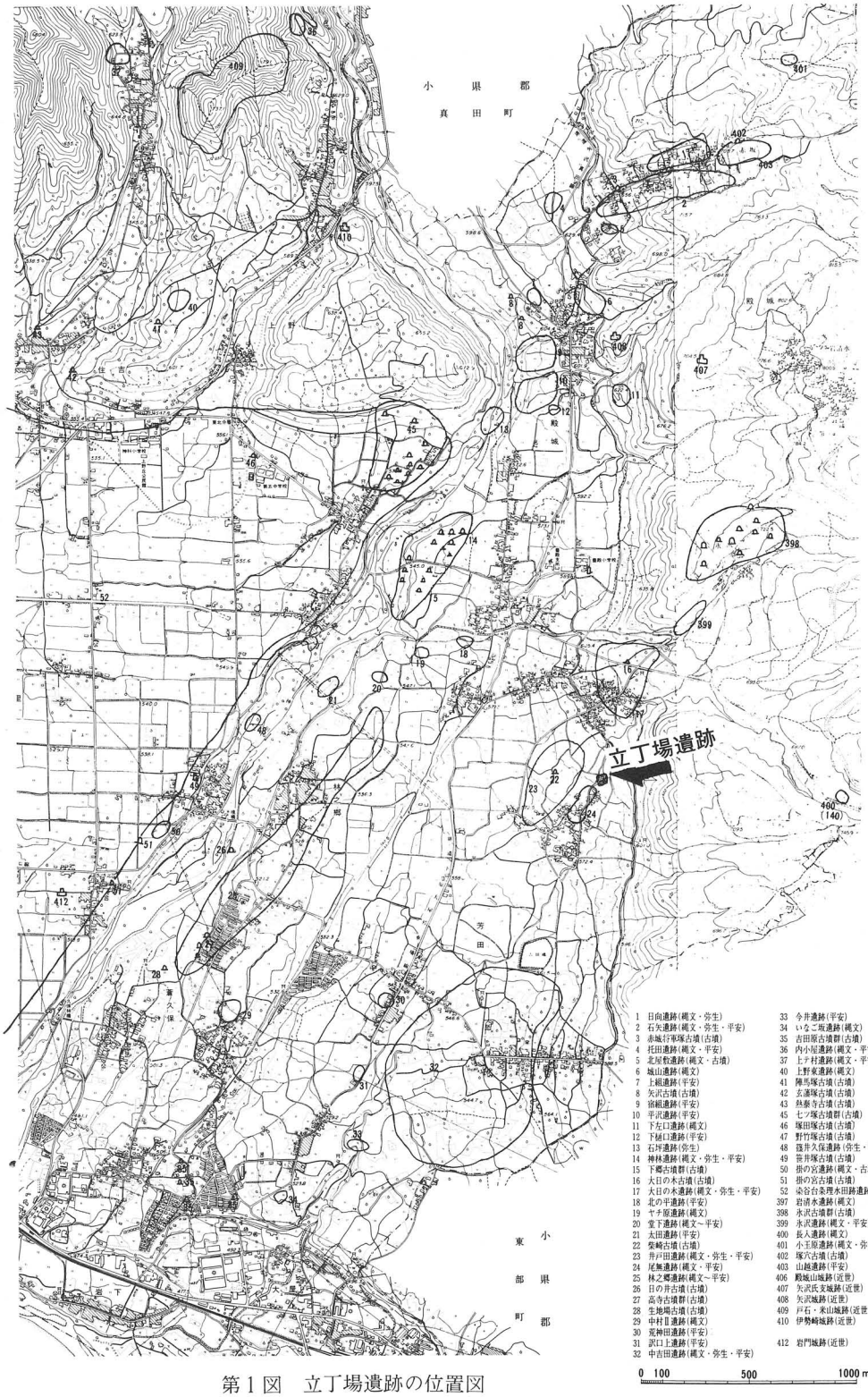
弥生時代の遺跡としては、後期箱清水式の遺跡がほとんどで、17遺跡発見されている。

古墳時代および歴史時代の遺跡は、矢沢川・瀬沢川・成沢川の扇状地、行沢川の谷と扇状地上に分布し、遺跡数は41ほどである。以上のように、豊殿地区だけでも数多くの遺跡が存在しさらにより広い範囲の中でみていくと、たいへん多くの遺跡が存在する。（第１図）

〈五十嵐幹雄〉

参考文献

上田市教育委員会編「上田市の原始・古代文化」（1974）



第１図　立丁場遺跡の位置図

第２章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

昭和55年度豊殿地区県営圃場整備事業に伴い、上田市大字芳田小井田区の集落東方に位置する立丁場遺跡が破壊される恐れが生じ、上田市教育委員会は県文化課の指導を受けて記録保存を行うべく、上田市遺跡調査団団長五十嵐幹雄と委託契約を締結し、発掘調査の態勢に入った。

本格的な現場発掘調査は11月17日から実施し、12月24日に終了した。以後、上田市立信濃国分寺資料館の整理室・研究室に於いて、出土品の整理及び報告書の作成をし、昭和56年３月末日に調査を終了した。

第２節　調査団の構成

調査団長	五十嵐幹雄	（日本考古学協会会員・上田市文化財調査委員）
調査主任	中川　政信	（長野県考古学会会員）
調査員	塩入　秀敏	（日本考古学協会会員・上田女子短期大学講師）
〃	児玉　卓文	（長野県考古学会会員・上田染谷丘高等学校教諭）
〃	宮原　洋子	
調査補助員	坂井　美嗣	（長野県考古学会会員・長野大学考古学研究会）
〃	小林　真寿	（長野県考古学会会員・長野大学考古学研究会）
事務局長	小林　三男	（社会教育課長）
事務局次長	小山　幸	（文化係長）
事務局	倉沢　正幸	（文化係主事）
〃	川上　元	（上田市立博物館庶務学芸係長）
〃	林　和男	（上田市立信濃国分寺資料館学芸員）

調査協力者

（地元）　箱山貴太郎・平原喜好・柄沢光男・柄沢況一・柄沢幸義・鈴木新一・中村九郎・箱山賢一・箱山宗太郎・箱山恒二郎・平原貞男・満木金一・満木新一・満木重雄・柳沢好春・内川わか子・柄沢栄子・久保田和江・久保田茂美・久保田友い・久保田浩子・平原文枝・満木幸恵・宮下義子

（その他）五十嵐芳子・中川恭子

第３節　発掘調査日誌

昭和55年11月17日（月）晴　　鍬入れ式（午後）

11月25日（火）晴　　ブルトーザーによる調査区域の表土削除作業。

11月26日（水）晴　　グリッド設定及び基準ベルト４本設定。午後よりグリッド掘り下げ。

11月27日（木）晴後曇　　Ａ－１～４、Ｂ－１～４、Ｃ－１～４、Ｄ－１～４、Ｅ－２～３グリッド掘り下げる。Ｄ－２内に焼土認める。出土遺物は、土師器・須恵器片が少量。

11月28日（金）曇　　グリッド掘り下げる。

11月29日（土）雨後晴

11月30日（日）晴後曇

12月１日（月）晴　　各グリッド遺構検出作業。第１トレンチ（西側区域外）内、南北に列石が確認される。出土遺物ほとんどなく時期不明。

12月２日（火）晴後曇　　遺構検出作業、第１トレンチ拡張、グリッド拡張（Ａ－1′～Ｆ－1′）、掘り下げる。

12月３日（水）雨後晴　　遺構検出作業続行。

12月４日（木）雨後晴一時雪　　午前中作業中止。午後よりトレンチ掘り。第２トレンチ内より打製石斧出土。

12月５日（金）晴　　第２トレンチ掘り下げる。

12月６日（土）晴　　第２トレンチ掘り下げる、トレンチ内より縄文土器数片出土。第１トレンチ・Ｄベルト断面実測。遺構検出作業続行、西側拡張区（第１・第２トレンチの間）より土器片出土、他区よりも出土量は多い。

12月７日（日）晴　　遺構検出作業・断面実測。

12月８日（月）曇後晴　　遺構検出作業。２ベルト断面実測。

12月９日（火）晴　　第１トレンチ拡張、掘り下げる。遺構検出作業・実測。

12月10日（水）晴　　第１トレンチ北へ拡張。東側区域外遺構検出作業。４、Ｂベルト断面実測。

12月11日（木）晴　　遺構検出。第１号住居址４分割掘り下げ及び実測。第２トレンチNo、２・No、３セクションベルト断面実測。

12月12日（金）曇後雨

12月13日（土）晴　　遺構検出及び実測。第１トレンチ拡張・掘り下げる。

12月14日（日）曇時々雪　　遺構検出及び実測、第１トレンチ拡張。

12月15日（月）雪

12月16日（火）晴　除雪作業及び道具類の点検整理。

12月17日（水）曇後晴　第１トレンチ拡張。第１号住居址セクション、Pit１～６断面実測及び写真撮影。

作　業　風　景

12月18日（木）晴

12月19日（金）晴時々曇　遺構検出。第１トレンチ列石、Pit７～12断面、第１号住居址平面、遺跡南西部実測。

12月20日（土）雪一時晴　遺構検出。第１トレンチ拡張・火床断面実測。遺構写真撮影。雪のため途中で作業中止。

12月21日（日）晴　火床・調査区域全体実測。各グリッド・火床写真撮影。遺構面上の遺物取り上げる。

12月22日（月）晴　遺構検出。Pit13～14断面実測及び前日からの実測続行。

12月23日（火）曇後雪　調査区域全体の平面実測。西側拡張区より出土の鉄鏃の実測。遺物取り上げ。火床２の北隅より土師器片出土。

12月24日（水）雪　鉄鏃及び土師器片取り上げる。現場発掘調査終了。

昭和56年１月～３月末　遺物整理及び発掘調査報告書作成。（於）信濃国分寺資料館

〈宮原洋子〉

調　査　団　及　参　加　者

第３章　層　序（第２図・第３図）

立丁場遺跡は烏帽子岳西南麓特有の河谷による押出扇状地上に位置し、標高はおよそ592.5mを測り、西南方向に傾斜する。

第Ⅰ層：黒褐色土層、「耕作土で吸水性に富む、粘性は弱く砂質である。」層厚は20cm前後。

第Ⅱ層：茶褐色土層、「粘性を若干もち礫を含む、砂質。」

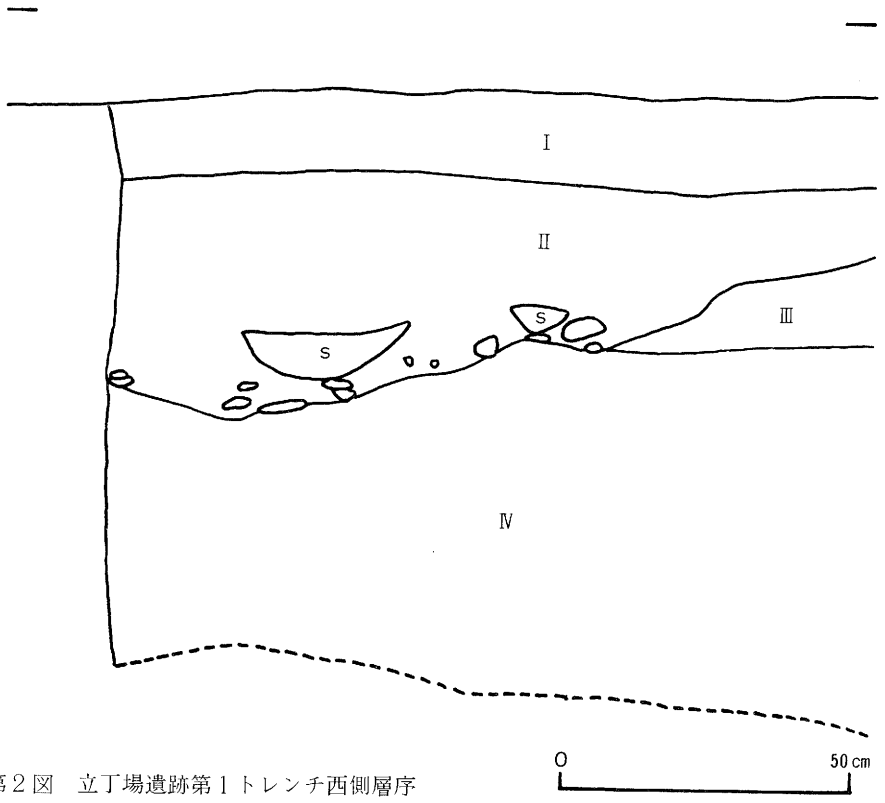
第Ⅲ層：黒茶褐色土層、「粘性は比較的強い、白色・橙色・黄色の粒子が混入する。」

第Ⅳ層：暗黒褐色土層、「強い粘性、第Ⅲ層と同じ粒子が混入する。」

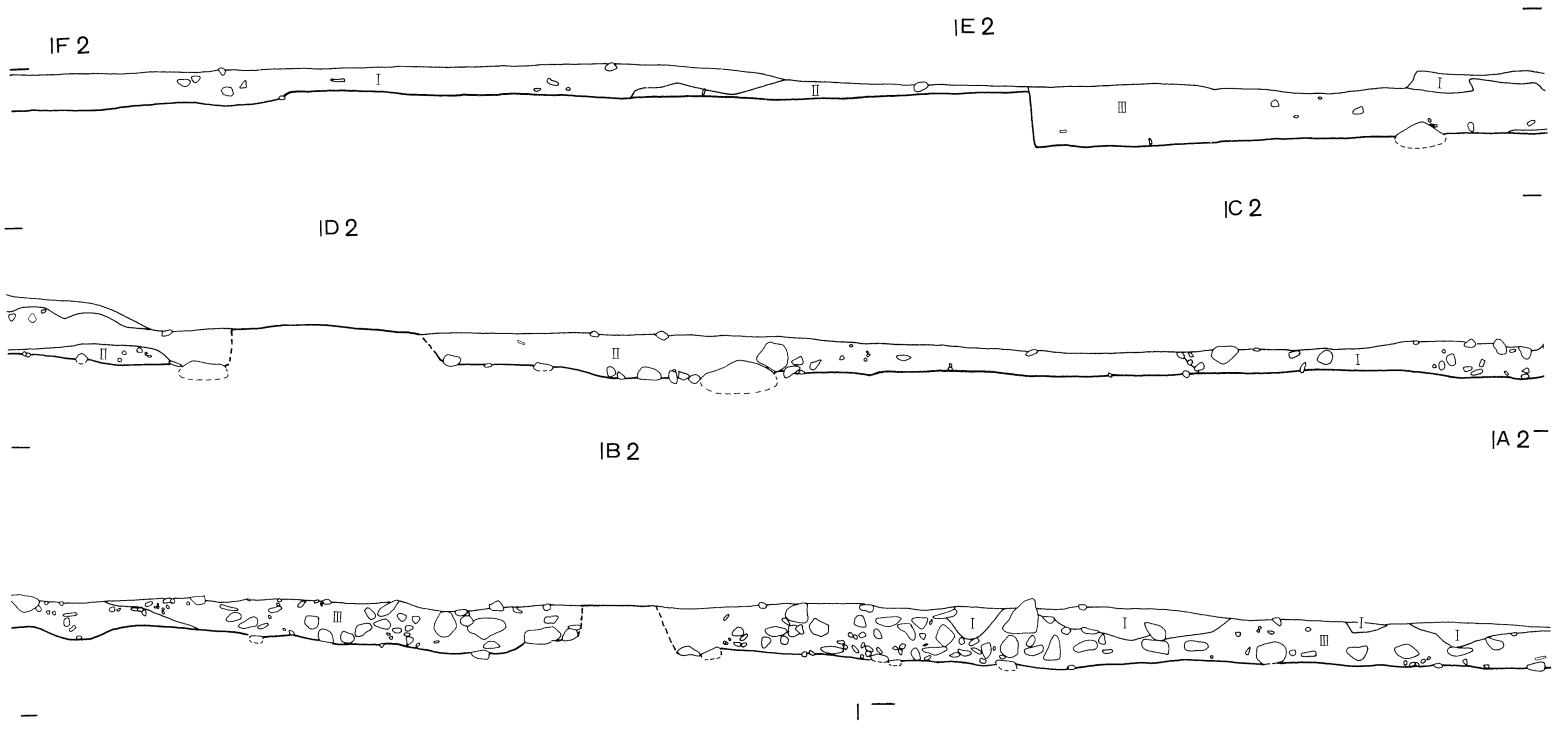
第Ⅱ層・第Ⅲ層・第Ⅳ層には遺跡東部に向かうほど礫を多く含み、第Ⅱ層・第Ⅲ層はすべて礫層によって覆われてしまう部分がある。遺構は第Ⅱ層直上において検出されている。

遺構内における地層の堆積は、耕作土である表土を重機によって削除した後の図であり、３層であるが、すべての層は耕作による攪乱と沢からの押し出しによる流れ込みによって寸断され、礫が堆積している。

立丁場遺跡は、自然的・人為的に寸断・破壊されていると言えよう。



第２図　立丁場遺跡第１トレンチ西側層序

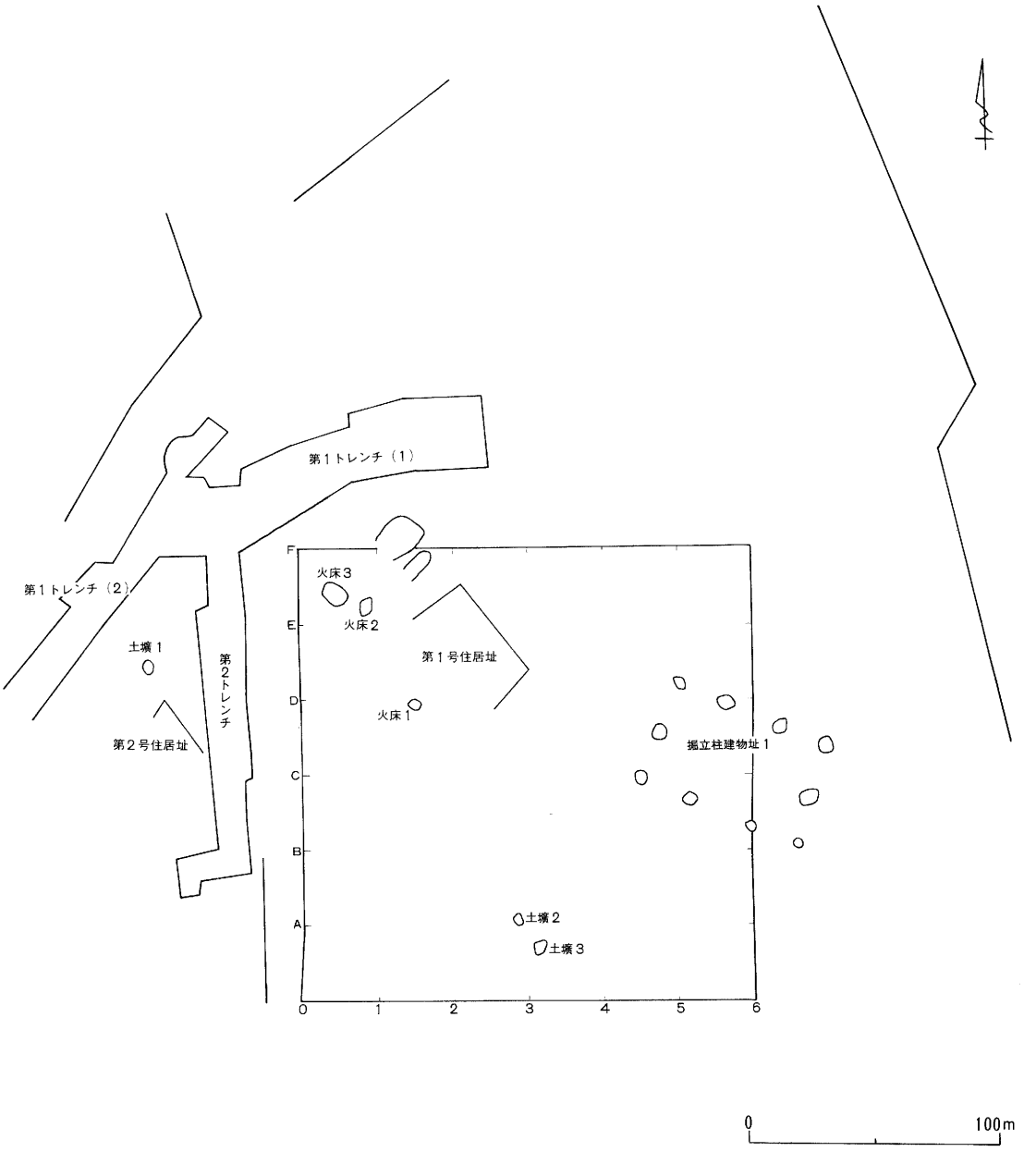


Ⅰ．褐色土層　（礫を部分的に含む）
Ⅱ．茶褐色土層　（　〃　）
Ⅲ．暗黒褐色土層　（　〃　）

グリット
F－2～E－2～D－2～C－2～B－2～A－2

0　2m

第3図　F2～A2列地層断面図



第４図　立丁場遺跡遺構全体図

第４章　遺構と遺物

調査区域内より検出された遺構は第１号・第２号の竪穴住居址２軒、火床址３基、土坑３基と掘立柱状建物址１軒である。掘立柱状建物址１は時期不明であるが、他は平安時代に比定される。また、第１トレンチ内に検出された列石遺構は、共伴する遺物が出土せず、時期が確認できなかった。

出土遺物は縄文土器・石器・土師器・須恵器・近世陶器等である。

第１節　遺　構

1.住居址

第１号住居址　（第５図・第２図版）

〈遺構〉　本住居址は調査区域北側（Ｆ－２・３、Ｅ－２・３グリッド内）より検出された。プランは傾斜地を平坦にし畑地化した時の段差に掛ったため、半分以上破壊されている。しかも耕作と沢からの礫の流れ込みにより、遺構面が寸断されており、検出状態はいたって悪い。検出されたプランは、北－40°－東に逼し、東西軸4,40m、壁高は検出面より21cm、コーナーはほぼ直角である。床面は礫の流れ込みなどによってところどころに石が散乱するが、硬くしまっている。

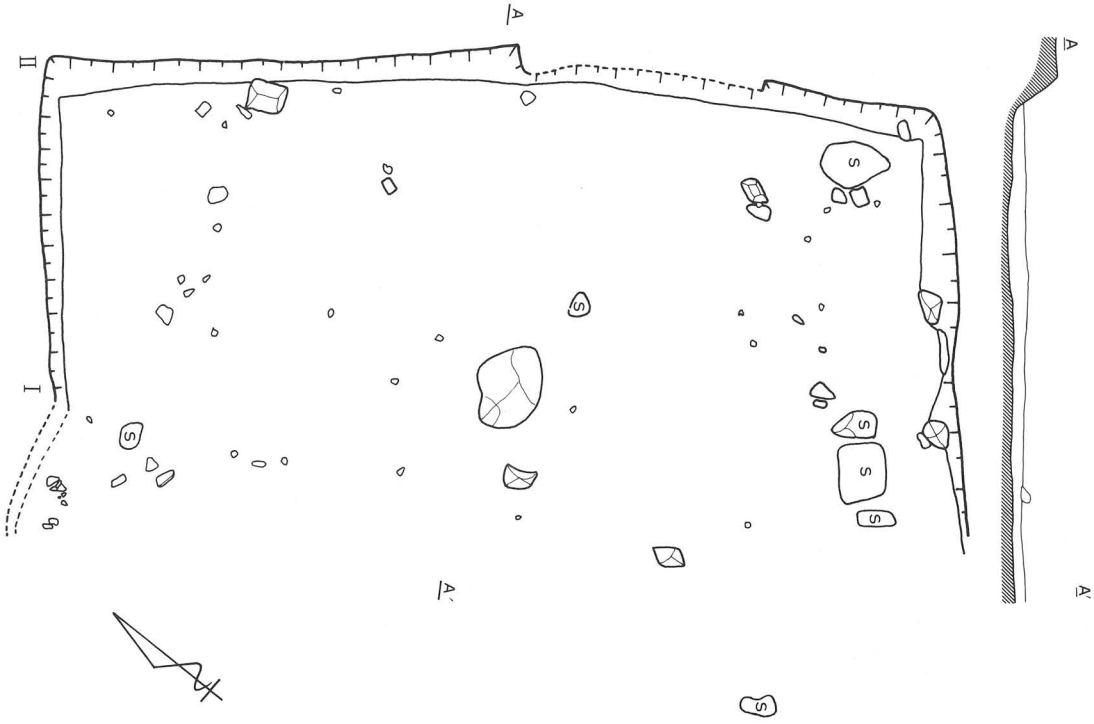
〈遺物〉　第１号住居址から出土した遺物は、内面黒色処理した土師器・須恵器甕及び坏であるがすべて小破片で図示できるものはなかった。土器は床面全体に破片が散乱している状態で出土した。

第２号住居址　（第７・12図、第２・３図版）

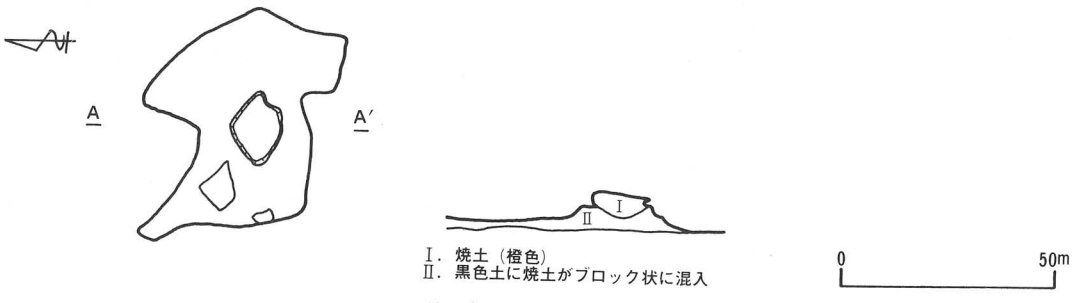
〈遺構〉　調査区域の最も西側、第２トレンチの延長区域に位置する。

プランは東側が第２トレンチにかかり、また南側は調査区域外になり全体を発掘することができなかったが、直角のコーナーを有する方形になると思われる。遺構内に礫が流れ込んでいることと、耕作によってほとんど壁は消失されている。

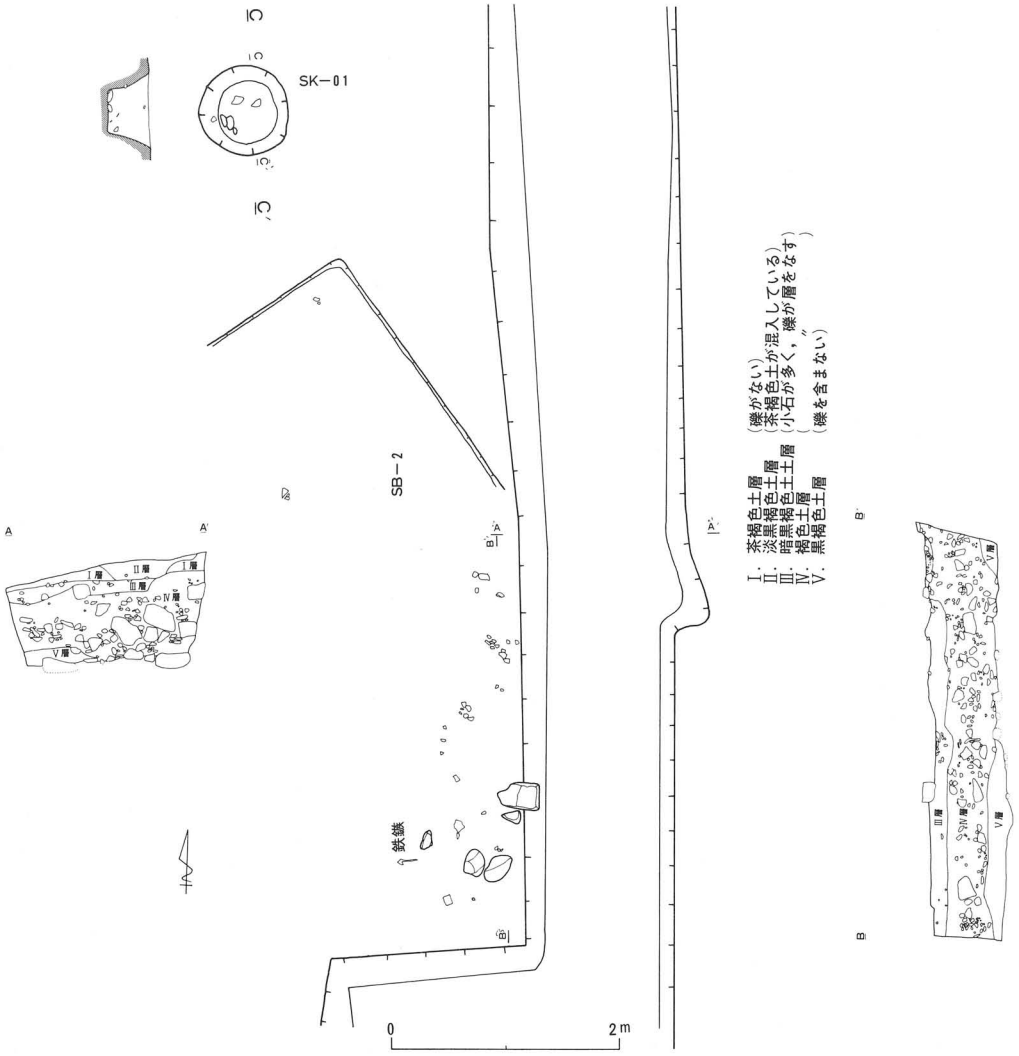
〈遺物〉　土師器坏形土器、須恵器甕形土器の破片と、南側から有茎の鉄鏃が１点出土した。この鉄鏃はほぼ完形であるが、かなり腐蝕している。また、須恵器高台付坏が出土している。



第５図　第１号住居址実測図



第６図　火床１実測図



第７図　第２号住居址・土壙１・第２トレンチ実測図

2.火床址

火床１　　（第５・６図、第４図版）

火床１は第１号住居址に伴う施設ではないかと推定される。検出時にはすでに大部分破壊されており、焼土が部分的にしか残っておらず、形態がどの様であったかは識別でき得なかった。

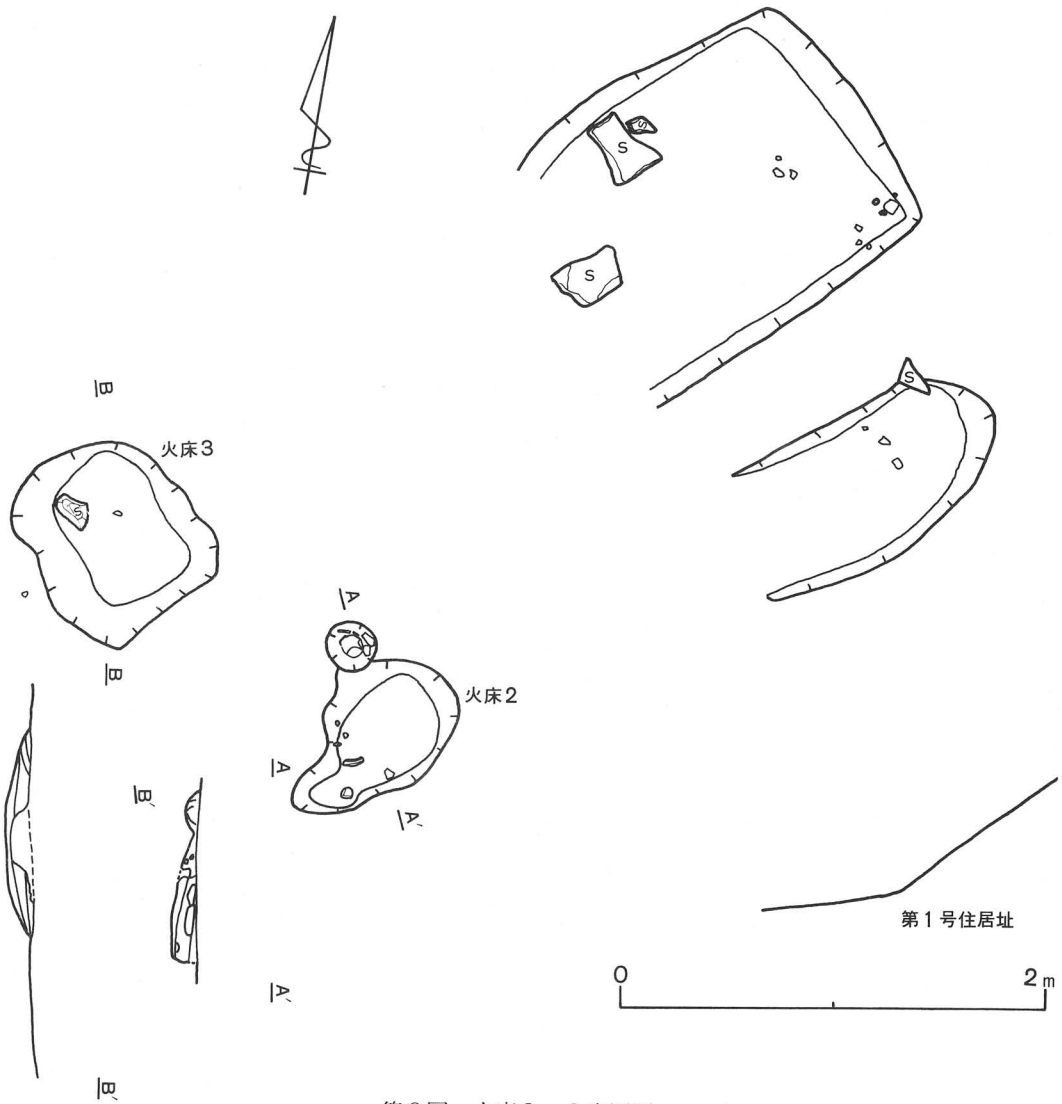
火床２　　（第８図、第４図版）

〈遺構〉　火床２は第１号住居址の西側に位置する。検出状態は第１号住居址と同様にほとんどが破壊されてしまい、焼土の下部が残っているだけである。

プランは48cm×89cmで隋円形を呈し、北側に土師器片が出土した。焼土の深さは検出面より約11cmで、３層〔Ⅰ層：黒褐色（礫を含む）、Ⅱ層：焼土（橙色）、Ⅲ層：焼土（黄橙色）〕に分かれ、Ⅱ層中の石は火が当っているが、Ⅲ層中にある石には火が当った形跡はない。

出土遺物は、土師器内面黒色処理の坏形土器のみであるが、小破片のため図示できない。

火床２・火床３が位置する箇所は第１号住居址の西側であるが、第１号住居址の真横に並ぶように落ち込みがあり、第１号住居址に重なる様に住居址状の掘り方が薄く観察できるので、２・３の火床址は、この落ち込みに付属する施設ではないかと思われる。



第８図　火床２・３実測図

火床３　　（第８図、第４・５図版）

〈遺構〉　火床２から90cm西に離れ、検出状態は火床２と同様である。プランは98cm×88cmの方形を呈する。焼土の深さは検出面より約11cmで、層は火床２と同じである。

出土遺物はない。

3.土　坑

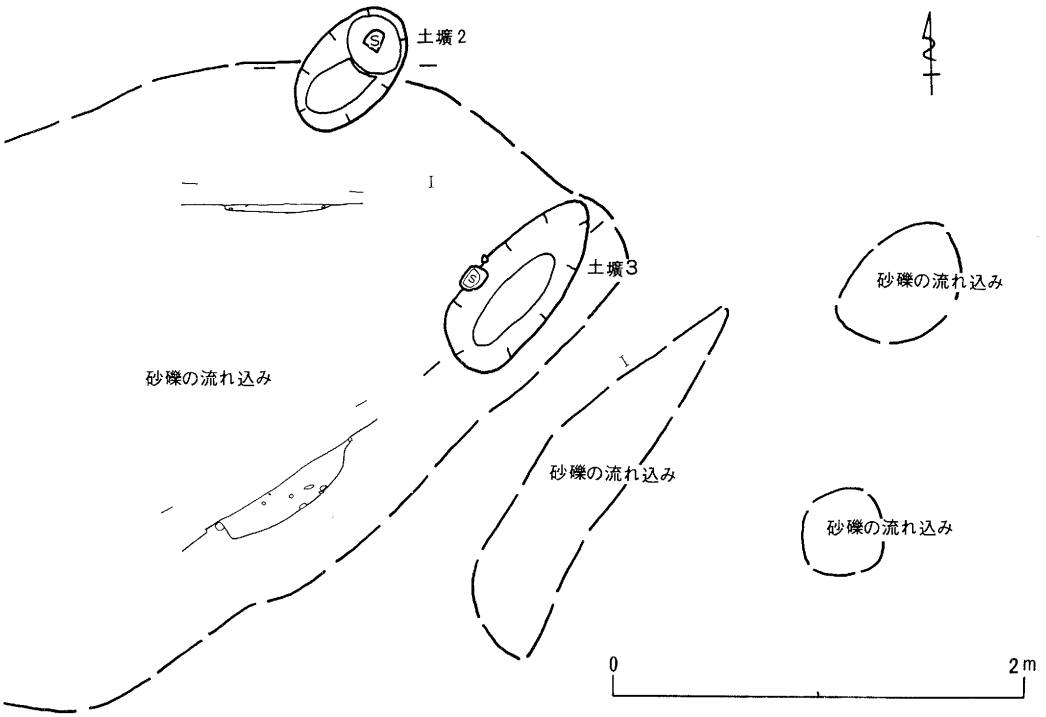
土坑１　　（第７図、第２・３図版）

〈遺構〉　土坑１は第２号住居址より北65cmの地点に位置する。規模は80cm×80cm、深さは検出面より35cmを測り、平面は円形プランを呈する。底部は平坦であるが礫が入る。壁は外湾ぎみに立ち上がる。覆土は小礫を含む黒褐色土Ⅰ層である。

出土遺物は覆土中に須恵器甕形土器の破片が数点出土したのみである。小破片のため図示はできなかった。

土拡２　　（第９図）

〈遺構〉　調査区域南側、Ａ－２グリッド内に位置する。規模は40cm×70cmで隋円形を呈し、深さは検出面より６cmと浅い。平面は隋円形を呈する。覆土は礫を含む黒褐色土層Ⅰ層である。遺物の出土はない。



第９図　土壙２・３実測図

土坑 3　　（第 9 図）

〈遺構〉　土坑 2 より南に95cm離れ、A－3 グリッド内に位置する。規模は42cm×100cm、深さは検出面より15cmであり、平面は隋円形を呈する。底部は礫が流れ込み凹凸する。西壁は直に上がるが、東壁はなだらかに上がる。層は土坑 2 と同じで、遺物の出土はない。

4.掘立柱状建物址 1　　（第10図、第 5 図版）

〈遺構〉　調査区域東側、E－6、D－5・6グリッドと延長した区域外に位置し、最も山際である。10箇所の柱穴が確認され、北－71°－西に長軸方向を指す。柱穴は 2 間・3 間の方形配列を呈する。長軸方向の 1 間の間隔は 2 m、短軸方向の 1 間の間隔も 2 m を測る。掘立柱状建物址の検出状態も他の遺構と同様に、耕作と礫の流れ込みにより遺構が攪乱され、柱穴には礫が流入し底部の確認が難しい。

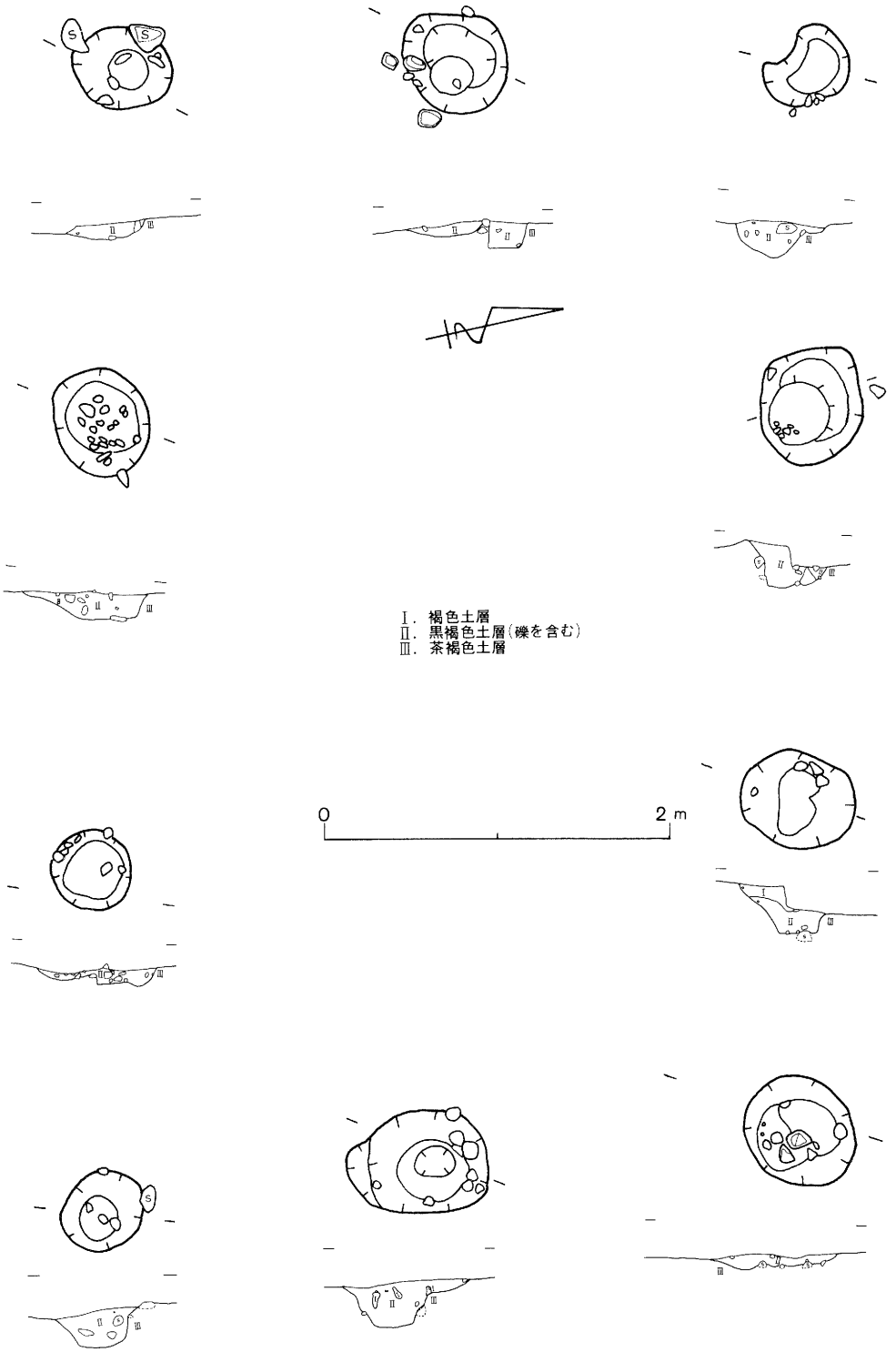
柱穴のプランは径45cm～75cmの円形状を呈し、深さは検出面より 5 cm～27cmであり、一定の規模を有しない。また、壁・底部は礫で埋まる。

各掘り方の内部・検出面上面からは、遺物の出土はみられなかった。

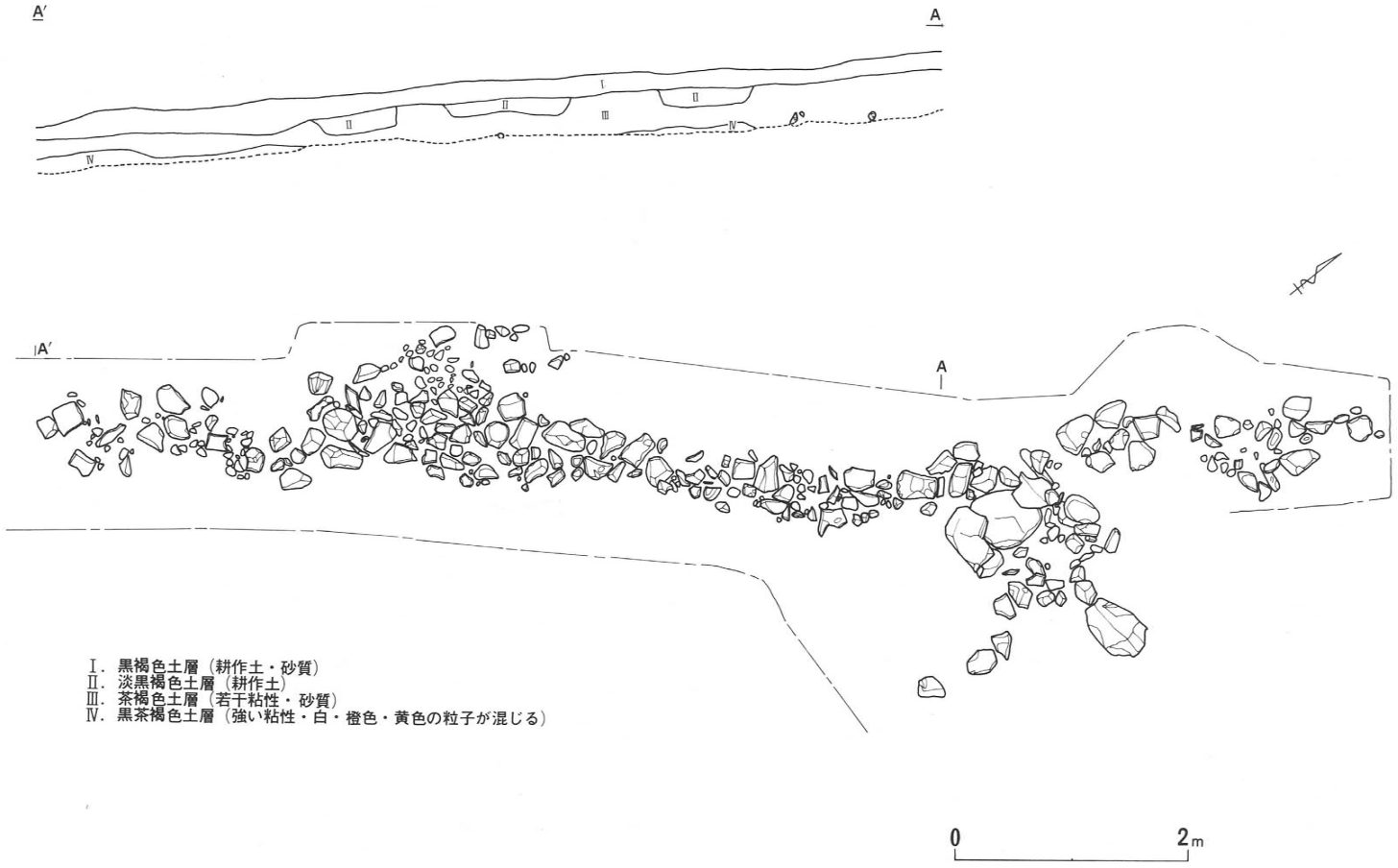
5.列石遺構　　（第11図、第 5 図版）

〈遺構〉　本遺構は調査区域外に設置した第 1 トレンチ〈2〉（調査区域より西側）内に検出された。表土下50cm、第Ⅵ層黒茶褐色土層面に、径20cm×20cm～20cm×45cmの石を幅約50cm、部分によっては 1 m30cmに配し、調査地の北西に位置し、南北に向け延びる。調査区域外に懸るため12m しか追求できなかったが、列石の様相からもっと南北方向に延びるものと思われる。

出土遺物は流れ込みと考えられる土師器の小片が 1 片検出されただけで他に遺物はなく、時期の確定はでき得なかった。



第10図　掘立柱状建物址１実測図



第11図　第１トレンチ（２）内列石遺構実測図

第２節　出土遺物（第12図）

立丁場遺跡の遺物の出土点数は非常に少なく、出土遺物で図示できるものは８点である。

須恵器

1．坏形土器、口径12.8cm、器高3.2cm、底径6cmで口縁部が外反する。轆轤形成で、底部は手持ちの篦削りを施す。内外面橙褐色で焼成はやや軟質である。

2．坏形土器、底径7.2cm、轆轤成形で底部は回転篦削りをし、高台を付けている。内外面黒灰色で焼成は良好である。底部に窯印が認められる。

3．坏形土器、底径9.9cm、轆轤成形で底部は回転篦削りをし、高台を付ける。外面黒褐色・内面青灰色、焼成は良好である。

4．坏形土器、底径８cm、轆轤成形、底部は回転糸切り。内外面灰白色、焼成は良好。

縄文式土器

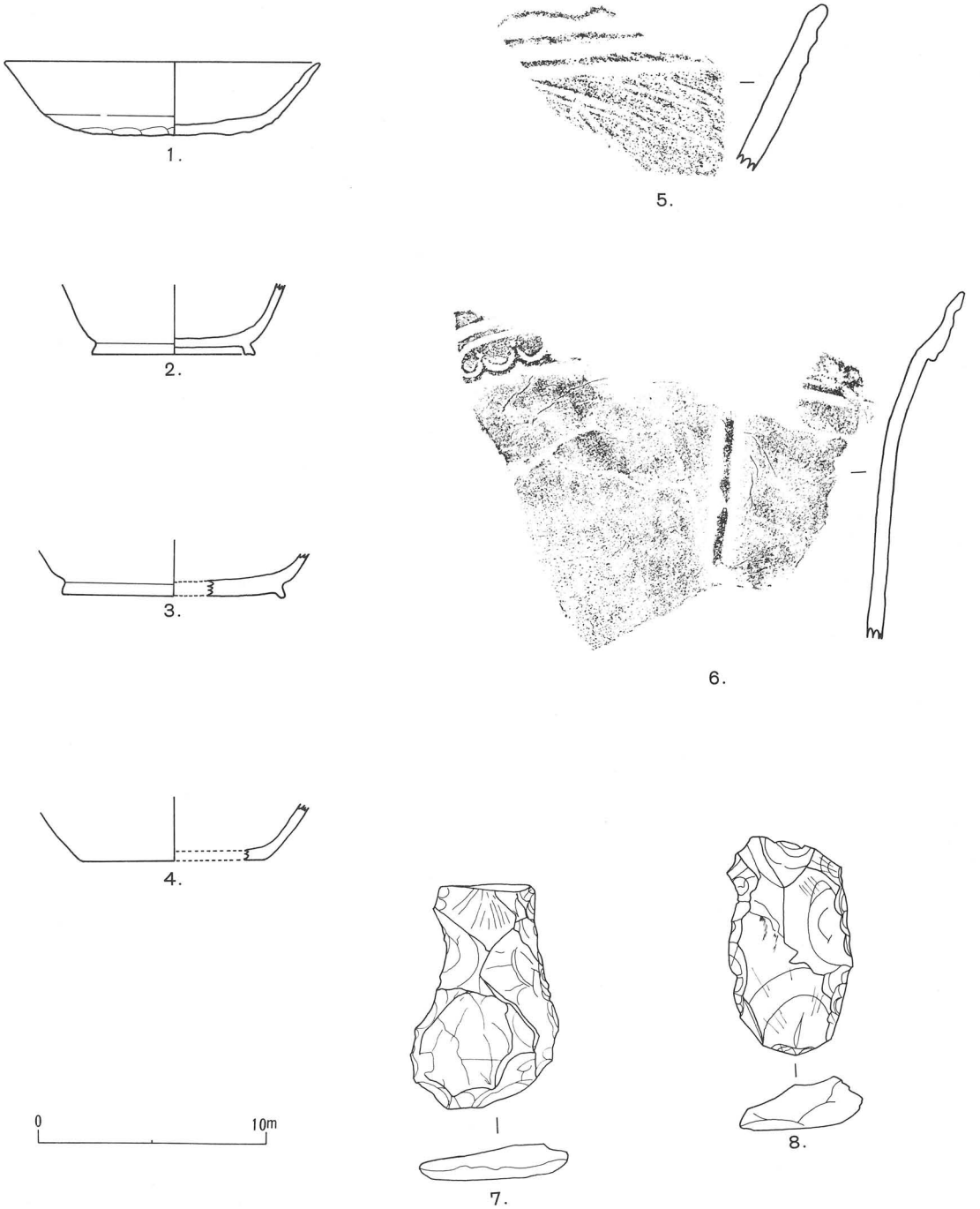
5．口唇下に約６mmの太い沈線が３本つけられ、その直下に斜めに細い沈線をおろす。内面はていねいに研磨されており内外面茶褐色を呈する　焼成は良好。口縁部分のため、器形は明言しかねる。

6，口唇近くに１本の沈線と隆帯がつけられ隆帯下から隆線が垂下する。隆帯下は無文で研磨され内面もていねいに研磨されている。

石　器

7．打製石斧、分銅型になる、材質は粘板岩、半分に折れてしまっている。

8．両サイドに刃部を造りだす、器形そのものは砕かれてしまい判然としないが、打製石斧ではないかもしれない。



第12図　立丁場遺跡出土遺物

第5章　ま と め

立丁場遺跡では国分期（平安時代）の竪穴住居址2棟に、第1号住居址に伴うと思われる火床1、第1号住居址の西に検出不可能であったが、方形の落ち込みに付設されたと考えられる火床2・3と、第2号住居址横に検出された土坑1、調査区域南隅に耕作によって攪乱をうけた箇所より土坑2・3を確認するが、出土遺物は伴わず性格・時期等を明らかにできなかった。東隅、調査対象外にかけて2間、3間の掘立柱状建物址を検出するが、この遺構も攪乱がひどく遺物は出土しない。

調査対象区・区外を含め傾斜地面上にある発掘区域は、耕作と礫の流れ込みで攪乱が進み、遺構面がほぼ破壊され尽くされており、遺物も押し出しによるものではないかと思われる。しかし、第2号住居址は出土遺物は少ないが、鉄鏃が1点、覆土中より出土しており注目される。

第1トレンチ〈2〉より検出された列石遺構は、性格・時期等は不明であるが礫層上に位置していることなどを考えると、非常に新しい時期に造られたものではないかと思われる。

遺物はほとんど出土せず、真間期（奈良時代）・国分期（平安時代）の須恵器坏形土器と、縄文時代・中期に比定される深鉢片・石斧1点・石器1点を図示した。

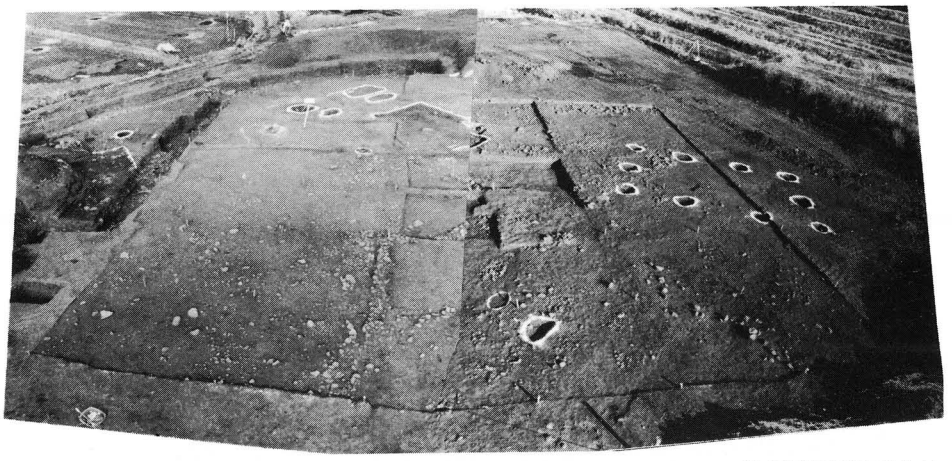
以上、立丁場遺跡の概要を羅列的に並べたが、各遺構とも破壊されており、遺構・遺物を対象とした問題点等は稿を改めて検討したい。

最後に、病気をおして発掘調査の中心となり御尽力いただいた上田市文化財調査委員・箱山貴太郎先生、平原喜好氏をはじめ12月の寒い中、調査に参加していただいた大日ノ木・小井田の皆さん他御協力いただいた多くの皆さんに、心より厚く御礼申し上げる。　〈五十嵐幹雄〉

図　　版

図版1　遺跡、遺構全景

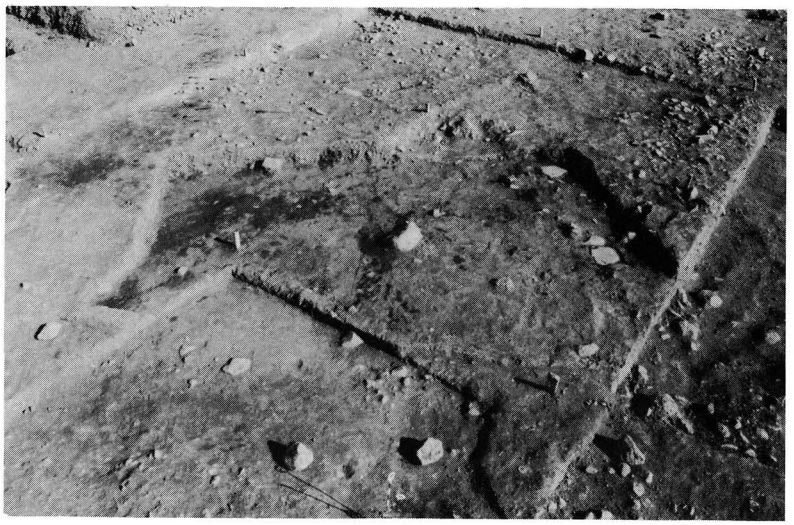
立丁場遺跡遠景



立丁場遺跡遺構全景

遺構検出作業

遺構検出作業

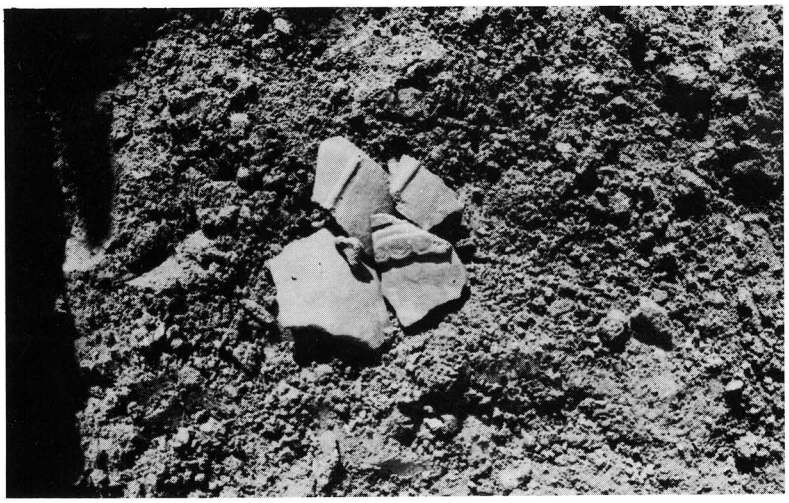


第1号住居址

第2号住居址・土壙1

第2号住居址出土鉄鏃

土壙1



縄文土器出土状態（第2トレンチ内）

図版4　遺構

火床1

火床2（上）・3（下）

火床2

火床3

掘立柱建物址

第1トレンチ内列石遺構

上田市文化財調査報告書　第17集

立丁場遺跡緊急発掘調査報告書

印　刷　　1981年３月20日

発　行　　1981年３月31日

編集者　　立丁場遺跡緊急発掘調査団

発行者　　長野県上田市教育委員会
長野県東信土地改良事務所

印刷所　　信毎書籍印刷株式会社